

花時計



vol. 42

2021 March

- 遠隔授業
- 学科&大学院の Topics of the year
- 教員エッセー
- 新任教員紹介
- 退職教員
- BOOKS 新刊紹介
- 心理相談センターの活動

特集

遠隔授業



～ 新しい授業形態を模索して ～



川村学園女子大学

我孫子キャンパス／目白キャンパス

遠隔授業

ICT支援委員会の発足と遠隔授業の開始

ICT支援委員会委員長

鵜沼 秀行

本学のICT (Information & Communication Technology) 活用を支援するために、2020年4月にICT支援委員会が設置されました。この設置に先立って、すでに2019年度に教学マネジメント会議は本学の教育におけるICTの本格的な導入を決定していました。この決定を受けて、基礎ゼミへのICT導入への準備として、2019年度後半から「基礎ゼミ・ICTワーキンググループ」が組織され、各学科の教員と職員によって導入への検討が進められていました。検討の結果、2021年度からiPadをすべての新入生に貸与し、ICTを活用した教育が開始される運びとなっていました。

偶然これと軌を一にして、昨年3月以降、新型コロナウイルスの感染拡大により、急速に遠隔授業とICTの利用が社会的要請として浮かび上がるようになりました。そこで、4月に先のワーキンググループを発展させてICT支援委員会が設定される運びとなったわけです。

ICT支援委員会では、オンラインの会議が4月以降頻繁に行われ、遠隔授業に実施に向けた様々な問題が検討されました。学生の通信機器所有の有無や通信環境の調査を実施して、現時点で可能な遠隔授業の形式が検討されました。また、ICTを利用した遠隔授業を実施するために、教員がアプリの操作や授業の準備をするための講習会が毎週のように実施されました。その結果、5月の連休明けからはすべての授業で遠隔授業が開始されました。

後期からは対面授業が開始されましたが、委員会は前期の遠隔授業の様子を把握するために、9月に全教員を対象としたアンケート調査を実施しました。遠隔授業で利用されたアプリや、効果的であったICTの活用方法、また今後の課題などが現在分析されているところです。今回の遠隔授業の結果から、今後の本学の教育にICTのメリットが活かされる方向が検討されることになるでしょう。

Online Learning

文学部の遠隔授業

国際英語学科

バラエティに富んだオンライン授業

国際英語学科では2020年度の前期、全ての授業がオンラインアプリケーションを使用した遠隔授業となりました。授業の事例をいくつか紹介します。

「イギリス文化史(1)」

イギリスの先史時代から18世紀のハノーヴァ朝の成立までの歴史をPower Pointにまとめ、ナレーションを入れてビデオ化し、授業1回に1つの資料を課題とともに配付した。ビデオ資料および「図説 イギリスの歴史」(河出書房新社)を利用した課題を提出させた。

「アメリカ文化史(1)」

動画視聴、質疑応答、授業内課題、授業外課題の作成の順で授業を構成した。動画は各回2本、合計40分弱の長さで作成した。さらに、授業時間内に動画の内容からクイズを出題したり、短い論述をさせたりした。

「ライティングI」

Formsを利用し、短い英作文の問題演習を行った。学生全員の進行状況や解答をリアルタイムで確認しながら授業を進めた。学生からの回答例をいくつか示し、どこが文法的、意味的誤りかを一緒に考察した。インターネットをコーパスとして利用し、英語の表現や単語が実際にどのように使われているか確認した。

上記に加え、学生からは「資料が見やすい」「音声や映像で分かりやすい」「課題が出しやすい」などの好意的な意見が多数寄せられました。

史学科

画面の中の学び

史学科でも5月以降、全ての授業が遠隔で行なわれました。講義についてはオンデマンドの動画・音声の配信を中心にした授業が多かったですが、演習では早い段階からTeamsの「会議」機能を用いて、同時双方向での授業を展開した先生が多かったようです。教員にとっても学生の皆さんにとっても初めての試みであり、また準備期間もわずかでしたので、授業開始当初は授業がきちんと成立するのか危ぶむ声も多く聞かれましたが、蓋を開けてみればほとんどの学生がオンラインでの授業に問題なく参加し、インターネットを通じた授業もおおむね円滑に進んでいきました。学生からは、通学時間がなくなり、家で授業を受けられるという声も挙がっていましたが、一方で長時間画面を見つめることで思った以上に疲労を感じたという声や、接続環境の整備が難しかったという声もありました。

図らずも授業におけるインターネットと電子機器の導入が今回一気に進みましたが、遠隔授業を行う中で見いだせた利点は極力残しつつ、日々の授業の中にうまく取り込んでいくことが今後の課題となりそうです。

心理学科

会えないからできる授業

心理学科は、心理学全般への理解力を高めると共に国家資格「公認心理師」の取得を希望する学生への技術習得を支援しています。心理専門職にとって話を聴く技術は必要不可欠であるため、3年次の心理演習の授業内容は実技と体験が中心です。

傾聴のトレーニングではカウンセラー役と相談者役のペアを組み、“興味があること”や“少し気になること”など、自分自身で相談内容を考えて繰り返し話を聴く練習をします。

授業計画では相対して座り、カウンセラー役は相談者の話を理解しながら、さらに表情やしぐさなどの非言語情報も観察する技術の習得を考えていました。しかし遠隔授業では会うことも許されず、自宅からオンラインで離れて講義を受けることになりました。

授業計画を立て直し、会えないからできる授業を体験できるようにしました。カウンセリングは対面だけではありません。電話相談やメール相談、最近ではSNSやビデオ通話を活用したオンラインカウンセリングも普及しており、学生たちが活躍する時には必要不可欠な技術と経験になると思います。

授業に参加した学生はビデオ通話には慣れた様子で相談者の話を熱心に聴きながら、画面から伝わる非言語情報を観察する初めての体験を楽しそうに学んでいました。

日本文化学科

オンライン卒業論文中間発表会

日本文化学科では毎年9月に「卒業論文中間発表会」を行っています。今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、対面での参加を教職員と卒業論文提出予定学生に限定し、1～3年生は遠隔形式で参加するという方法で開催しました。

中継にはMicrosoft Teamsを利用し、あらかじめ学科の全学生と教職員が参加するチームを作成しました。当日は会議機能を使用して発表会の様子を中継し、1～3年生は事前にTeamsにアップロードされた配布資料や共有画面をパソコン・タブレット等で視聴しました。質疑応答にはMicrosoft Formsを利用しました。発表者ごとにフォームを作成し、そのURLをTeamsで共有しました。フォームに質問を書き込むと、発表者は質問を閲覧できます。それに対して、発表者がFormsのフィードバック機能から質問者に対して回答しました。

【1～3年生の参加環境】

- ① 配布資料の印刷・共有
- ② リアルタイム配信の視聴
- ③ 質問の入力、回答の確認



使用した機能

- ① ファイル: 配布資料の共有
- ② 投稿: 諸連絡、質問フォームURLの共有
- ③ 会議: リアルタイム配信



使用した機能

- ① 質問者: クイズから質問
- ② 発表者: フィードバックによる回答

対面形式と遠隔形式を混合させた中間発表会は初めてのことで、計画当初は実現するか懸念されました。しかし、前期に行われた遠隔授業で教職員・学生ともに各アプリケーションの利用法を理解していたため、滞りなく中間発表会を開催することができました。日本文化学科ではICT教育を積極的に取り入れ、より効果的な教育実践を進めて行きたいと思います。

Online Learning

幼児教育学科

保育内容の理解と方法（運動）

授業はじめにTeamsテレビ会議システムを使用し、前回の授業の振り返りやその日の授業の導入、アイスブレイク等をおこない、その後はオンデマンド動画配信に切り替え、動画を見ながら実技の授業を実践する形を採用しました。授業後には、その日に実践した内容や感想、質問等を「学修ノート」に記載させ、毎回学生に対して個別にフィードバックを行いました。実技科目という特性上、紙資料やスライド配信では授業の展開が難しいため、実際に教員が動いている映像を動画資料として作成し、学生が映像を見ながら実際に身体を動かせる環境の構築を目指しました。他者とのコミュニケーションを大きな学修課題とする科目ですが、オンライン上において、運動を通じて他者とコミュニケーションを図る機会をいかに作るかということが、今後の課題として挙げられます。

教育学部の遠隔授業

児童教育学科

特徴的なオンライン授業の方法

小学校の教員養成を行っている児童教育学科では、将来、児童と対面して授業をすることが求められます。そこで、なるべく対面授業と変わらないように色々な工夫を凝らし、授業の質を保证するようにしました。特に重視したことは、「教員⇄学生の双方向のやり取り」や「学生⇄学生の双方向のやり取り」です。

例えば「教職論（1年生）」では、授業中に配信される映像を視聴後、事前に配布されたワークシートを使用しながら、双方向で意見交換をしました。また、事前に教科書の該当箇所を学習し、授業では、ワークシートを活用した反転授業を実施しました。

また、「国語科教育法（2年生）」では、前半は講義形式の授業（文学教材の分析方法や授業デザインの方法的講義など）、後半はそれを踏まえて、授業TEAMS内にさらに小さなチームを用意し、演習形式（少人数でディスカッションし、その考えを全体に共有）の授業を行いました。

このように、学生のプレゼンテーションや学生同士の集団討議をリアルタイム（オンライン）で実施できたのは、少人数教育ならではのことと思います。

なお、対面授業と異なり、資料の提示が困難なオンライン授業において、本学科では、文部科学省や独立行政法人教職員支援機構など信頼性の高いサイトから配信されている映像を駆使し、学生が取り組みやすいように、教員一丸となって学生の学習を支えました。

Online Learning

生活創造学部 遠隔授業

生活文化学科

ハイブリッド実験・実習

生活文化学科では、遠隔授業実施に際し、授業の質を十分に保ちながら、新しい授業形態に学生と教員で取り組みました。

まず、学生の通信状況の確認、遠隔授業の参加方法のテストについては、少人数制の必修科目を中心に丁寧なフォローアップを実施しました。授業の回を重ねるごとに学生のICTスキルの向上が見られ、学科の専門科目の大半は双方向型授業を導入して、オンラインでの発表・ディスカッション・チャットでの質問・ファイルの情報共有などオンライン環境が最大限活用されました。



また、栄養士関連科目では、実験実習科目もオンライン授業と補講期間の実習を組み合わせたハイブリッド形式の授業を試みました。オンラインにより実施した調理学実験では、事前に自宅で実験ができる実験キットを郵送し、家庭にある調理機器を活用して、各自が実験を行いレポートを提出しました。従来の対面授業では数名のグループで実験を行うのに対し、一人ひとりで実験を行ったため、実験結果に対する理解が深まり、レポートの質が一段と高まる効果を得られました。

大学に通学できない分、学科の教員のフォローアップを丁寧に行い、一人も取り残されることなく、遠隔授業に参加できました。



観光文化学科

1. オンライン人力車（東京・浅草）

乗車体験

新型コロナウイルスの感染拡大は、観光業界に暗い影を落としています。それでも、オンライン体験ツアーなど新しい観光スタイルが誕生し話題となっています。そこで、観光文化学科の1年生の必修科目「プレゼミナール」では、オンライン人力車（東京・浅草）の乗車体験を実施しました。4クラスのうち、柳川ゼミと丹治ゼミは「まちあるき」をテーマに浅草や目白のまちあるきプランを作成してきました。街の観光案内をしながら巡る人力車は、観光スポットの選び方や説明の仕方などを学ぶ格好の教材です。



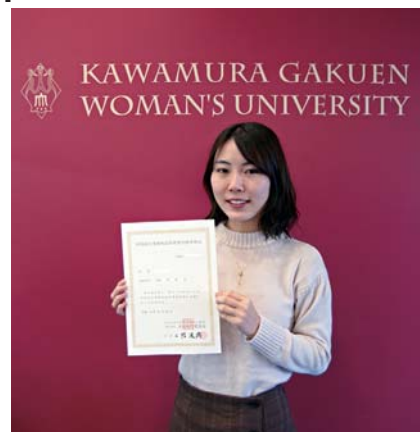
乗車当日、学生はzoomで自宅から接続し、車夫の三浦翔平さんは、タブレットを搭載した人力車を実際にひいて街を案内してくださいました。浅草雷門から始まり、東京スカイツリーを眺め、二天門を経て浅草寺へ。クイズあり、歌あり、笑いありと、観客を楽しませながら歴史や文化を語るテクニックで、withコロナと言われる時代の新しい形態の観光体験となりました。

現在では、タイやイタリアなど海外在住の方々に向けても、オンライン人力車でリアルな街案内をしているとのこと。今まで時間がない、体力的に難しいなど、様々な事情で旅行に行けなかった方々も気楽に参加できるオンライン観光は、マーケットの拡がりに貢献し、また、締め言葉では「この仕事が世界中の誰かの幸せに繋がれば嬉しい。」というお話もいただきました。

現在では、タイやイタリアなど海外在住の方々に向けても、オンライン人力車でリアルな街案内をしているとのこと。今まで時間がない、体力的に難しいなど、様々な事情で旅行に行けなかった方々も気楽に参加できるオンライン観光は、マーケットの拡がりに貢献し、また、締め言葉では「この仕事が世界中の誰かの幸せに繋がれば嬉しい。」というお話もいただきました。

2. 前期オンライン授業 + 自習で、
国家試験合格！

前期の「旅行業務取扱管理者講座(1)」をオンラインで履修し、夏休み中にJRの運賃計算や国内地理資源などについて、地道に自習を重ねた結果、観光文化学科2年生のU・Mさんが、2020年度 国内旅行業務取扱管理者試験に無事合格しました。本当におめでとうございます！



国際英語学科



国際英語学科では「英語を使う」体験を重ねて実社会で役立つ英語運用能力を身につけることを重視しています。

台湾の中山医学大学に昨年9月から留学していた4年生が7月に復学しました。コロナの影響で3月以降はオンライン授業となりましたが、優秀な成績を収め、向こうの先生方からも高く評価されました。彼女の影響か、本学科のみならず我孫子キャンパスでも中山への留学を希望する学生が出ています。

語学検定も出題内容が年々難しくなっていますが、助教のM・シャバリン先生のところへ英語面接の訓練のために訪れるなど、本学科の学生は受験に積極的です。後期には1名が実用英語技能検定試験（「英検」）準一級に挑戦しました。

9月には久々の対面行事として卒業研究中間発表が実施されました。学生はそれぞれレジュメを用意して口頭発表し、先生方から鋭い質問やコメントが寄せられました。

来年度は学生が再び充実した学生生活を送れるよう、学科全体で盛り上げていく予定です。（菱田 信彦）

史学科

新型コロナウイルス流行の影響で、史学科でも前期は、遠隔授業を行いました。急なことであり、また慣れない機器を用いての授業は、教員にとっても学生にとっても手探りの状態でした。しかしこのような状況であるからこそ、多くの学生は熱心に授業に取り組んでくれたようです。

また、ほとんどの学外見学・実習は残念ながら中止されましたが、10月24日になってようやく「博物館実習」の授業の一環として土浦市立博物館を訪れることができました。当日は感染防止の観点から、最初に簡単な説明を受けたほかは、館内を自由に見学していましたが、かつてこの博物館に勤めておられた塩谷先生からは折に触れて様々な話を伺うこともできました。特に学芸員資格の取得を目指す学生にとっては、博物館の舞台裏を垣間見て、普段は表に出てこない学芸員の具体的な仕事内容を知るための貴重な機会になったのではないかと思います。（大西 克典）



心理学科

心理学科には医師、カウンセラー、心理判定員、司法鑑定補佐など、実務家としてのキャリアを持つ教員が多数います。今年度の心理実習はコロナのため現場に出向くことが困難になりましたが、実務経験豊かな人材の強みを活かし、工夫しながら学修を支援しています。

1年生対象の「心理実習（入門）」では施設見学を絞って、学内での現場の学びを充実させました。初回では、学生は公認心理師の関わる5分野（医療・教育・司法・福祉・産業）の、どこに、なぜ興味があるか付箋に書き、壁に貼って共有しました。なじみ深い教育分野が一番人気で、司法分野もドラマや小説を通して興味がある様子でした。現在はチェーンレクチャーで、教員たちが自分の関わる現場の様子を伝えています。実務家ならではのリアルな話を聞いたうえで、司法における厳しさや教育における連携の重要性など、学んだことをまとめ、さらに自分で調べたことを加



えて、各分野の公認心理師の活動をレポートに仕上げます。

全分野を終えたら、自分のキャリア希望先はどこか、理由と共に付箋に書いて貼ってもらう予定です。素朴な興味から現場を知って一歩進んだとき、壁面にはまた新しい景色が広がることでしょう。（北原 靖子）

日本文化学科

後期から対面授業に戻り、日本文化学科では、随時、学外授業やゲスト講師を招いた授業も行っていくことにしました。

例年、学外授業として実施している歌舞伎（1年生対象）、文楽（2年生対象）、能楽（3年生対象）の「鑑賞教室」は、マスクを着用しての鑑賞となりましたが、コロナ禍においても古典芸能に触れることができました。また、1年生の必修科目・日本文化入門（2）の学外授業として、東京国立博物館の特別展・平常展の見学を10月17日（土）に行いました。「桃山―天下人の100年」と題された特別展は、戦国時代を代表する著名な作品が惜しげもなく並び、参加者は豪華絢爛な時代の風潮を体感する機会になったと思います。

10月28日（水）には葛野りさ先生が担当する「日本文化実技Ⅵ（能の仕舞・謡い）」で宝生流・和久莊太郎先生をゲスト講師としてお招きして「能装束の着装体験」を行いました。「船弁慶」で登場する「静御前」と「平知盛の怨霊」という役の装束を解説していただきながら着付けていただく貴重な体験となりました。（伊藤 純）



教育学部

Faculty of Education

TOPICS OF THE YEAR

幼児教育学科

1年生の幼児教育体験学習ではコロナの影響により飯盒炊爨を中止して「巨大な風船」を作りました。時間をかけて広い体育館でカラーポリ袋を切り開いて絵を描き、みんなで協力して2枚、4枚、8枚とどんどん大きくつなげていきます。最後に大きな袋状に合わせて送風機で空気を入れて閉じました。巨大な風船がふんわりと出現すると「すごーい！」と歓声が上がりました。持ち上げたり、寄りかかったり、透けた綺麗な色や絵を眺めたり、中に入ってみたりと思い思いに楽しみました。一人ひとりの力が実を結びみんなで巨大な風船を完成させることができた喜びは子どもとのかかわりにおける大切な糧となります。これからも「楽しい」と感じる気持ちを大切に様々な体験を積んでいって欲しいと思います。（竹内 啓）



児童教育学科



児童教育学科2年生は授業の一環で、我孫子キャンパス近くの、我孫子市湖北地区公民館主催『寺子屋コホミン―地域の小学生のための「女子大のお姉さんと勉強しよう」―』に参加しています。参加者の小学1年生から小学4年生と「はじめのゲーム」で仲良くなったあと、プリントで勉強を進めます。プリントは公民館職員の方（元、小学校校長）が作った、一人ひとりの子どもに合わせたオリジナルプリントです。マンツーマンでじっくりと指導するので、参加した子どもは「わかりやすいし、楽しかった」と大喜びです。子ども達からは、「また、あのお姉さんと勉強したい」と大好評です。また、子どもが帰った後、担当した職員の方が、学生全員にその日の授業の改善点を指導してくださいます。実際に子どもと関わるだけでなく、自分の指導についても具体的に教えていただけるので、学生からは「来年の教育実習に役に立つ」「楽しかった」といった感想が寄せられています。

（向野 光）



生活文化学科



試作の完成（一例） トマトのくりぬきサラダ(左)と豆腐ハンバーグロコモコ風(右)

生活文化学科の専門教育科目「地域活性イベント論」では、我孫子市生涯学習センター（通称：アビスタ）内にある「喫茶ぶらっと」のレシピ開発に取り組みました。

喫茶ぶらっとは、障がいを持たれた方々の就労支援の場として、障害福祉サービス事業所はるか（社会福祉法人つくばね会）が運営しています。はるかからの依頼を受けて、科目を履修している3年生が、栄養学の知識や女子大生の感性をいかしてレシピ開発に取り組みました。

しかし、コロナウィルスの影響により、授業はオンライン。対面での意見交換ができない難しさもありましたが、学生は2つのグループに分かれてオンラインで話し合いを進めました。その結果、ひとつのグループははるかで作っている豆腐のハンバーグと季節のカレー。もうひとつのグループは同じくはるかの豆腐のサラダとトマトのくりぬきサラダのレシピを考案し、そのレシピをもとに助手の先生が試作を行いました。

学生たちが考案したメニューは、間もなく喫茶ぶらっとで提供されます。この他にも、はるかで作っているプリンを使ったデザートメニューや、けやき（社会福祉法人つくばね会の相談支援事業所）で作っているパンを使用したメ

ニューなども手がけました。

コロナ禍で取り組んだ産学連携事業。慣れないオンラインという環境のもと、学生たちは新たな社会貢献のかたちを見つけたのではないのでしょうか。（藤原 昌樹）

観光文化学科

「観光の情報デザイン(2)」の授業では、『広告と広報の違い』、『広告の種類（インターネット・WEB広告とマス広告）』など、企業の情報伝達活動における基礎的な知識を学んだ後、実際に観光の現場では、どのような広告・プロモーション活動が行われているのか、を考察しています。

今年度は、南太平洋の楽園『フレンチ・ポリネシア（タヒチ）』について、日本から就航している航空会社エア タヒチ ヌイと、タヒチ観光局日本支局の全面協力の下、日本のマーケットにおいて、実際に行われている広告・宣伝活動に関して、数回の授業のなかで具体的な多くの事例をご講義いただきました。学生は、それらのタヒチの現状や日本人の嗜好などを踏まえ、グループワークを通じて、若年層（大学生～20代前半）が『いつか行きたい憧れの場所』として、その認知度を高めるための『タヒチのPR・広告マーケティングプラン』をディスカッションし、関係者の方々の前でプレゼンテーションを行いました。（柳川 悦子）



大学院

F さんの修士論文

本学の大学院人文科学研究科比較文化専攻博士前期課程に在籍しているFさんは、他大学の法学部スポーツシステムコースを卒業して本大学院に入学してきました。Fさんの修士論文の主題は「スポーツにおける地域貢献」です。指導教員は高山啓子教授ですが、スポーツに関する部分を筆者が指導しています。本稿では、Fさんの修士論文を紹介しましょう。

Fさんの関心は、経営的に自立したスポーツ組織が地域活性化を持続的に実現できる体制づくりにあります。なかでもFさんが小学校から始め、現在も社会人クラブチームでプレーしているサッカーの中心的組織である日本プロサッカーリーグ（以下、Jリーグ）が始めた社会連携活動（通称「シャレン！」）に注目しました。Jリーグは、ドイツのブン

デスリーガを参考にして創設されましたが、Fさんは中学3年生の終わりに、VfL Wolfsburg や FC Schalke 04, Borussia Mönchengladbach などのゲームを現地で観戦しています。Jリーグとブンデスリーガの比較も交えながら、修士論文ではJリーグの社会連携活動がスポーツによる地域活性化のモデルケースになるかを検証し、新たな地域貢献の可能性について論じることを目的としています。コロナ禍の影響によりフィールドワークが制限されましたが、修士論文の完成が楽しみです。

（藤原 昌樹）

VfL Wolfsburgの本拠地
[Volkswagen Arena]
(2012年3月撮影)



生きた言葉に魅せられて

教育学部 児童教育学科
小山 久美子



誰でも人生で影響を受ける人が3人いると聞いたことがあります。その最初の一人である恩師に出会い、英語学に惹かれ、この世界に身を置くことになりました。実を言うと、大学入学当初は、日本文学、特に『平家物語』に出てくる文覚を研究しようと思っていました。それが英語、しかも文学ではなく英語学の道に進むことになるとは思っていませんでした。

恩師の専門は古英語で、研究室に入ると天井まである本棚いっぱい英文の例を抜き書きしたカードの箱が積み重なっていました。それを目にして、研究はこういうふうのコツコツと資料を集めて進めていく地味な作業なのだと思ったものです。これが私の原点ですが、古英語は私の手に負える代物ではないので、現代英語を扱っています。

大学院時代は、N.チョムスキーの変形文法の研究が盛んな時で、文脈や話し手等を考慮しない、まるで真空のカプセルに入っているような英語が扱われていました。その時に受講したUCLAの言語学セミナーの授業で、英文の容認度についての質問の際に教授が「英語の母語話者だけ答えなさい。」と言ったのを聞き、母語話者の直観 (intuition) が必要なのだと痛感しました。その後、帰国して英語の母語話者でないからこそ英語を客観的に考察できると言われたこともあり、文脈も話し手もいる英語を研究対象に研究することにしました。

現在は、中間構文、分裂文・擬似分裂文、there 構文などの構文研究と比喩表現等の語用論の研究をしています。

構文研究では、これらの構文がどのような情報構造を持ち、どのような使われ方をしているのかを英字新聞や小説を資料に用いて分析しています。限られた字数で客観的に報道すると思われる新聞でも強調構文と呼ばれる分裂文が

使われ、何かを際立たせる役割もしながら、トピックを導入して情報の流れに沿った形になっていることがわかりました。また、分裂文は文語で用いられることが多いと思っていましたが、在外研究でイギリスに滞在した際に録画したテレビドラマや大学の授業中の会話で教授が用いており、口語でも使用されていることも確認できました。

語用論に関しては、英語と日本語両方のメタファーなどの比喩表現を分析しています。在外研究でイギリス滞在中の研究会で“Her boyfriend is a pig.”という例文について、「ブタは汚い (filthy)」ので「彼氏は汚い」という解釈になると説明がありました。もちろん、「太っている」という解釈もありますが、どちらかというところ「汚い」方が優先するということでした。私たちも食後に「ブタになった。」とか「正月明けのお前はブタだ。」など、「ブタ」を会話で使うことがあります。日本人としては「ブタになった」と聞くと「太った」と思い、「汚くなった」とは解釈しないでしょう。どうも文化（あるいは文脈）が異なると解釈にズレが生じることがあるようです。私たちが日常生活の中で比喩表現を無意識に使って通じ合えるのは、共有できる経験や知識も関わっているのだと実感しました。

最近の英語教育の現場では、ますますコミュニケーション力が重視されています。構文研究も語用論研究も英語教育において果たす役割は大きいので、今後もこれらの研究を続けていきます。



イギリス滞在時のフラットの
ベイ・ウィンドウから見た庭



The Regent's Park のバラ

中世巫女の仕事と育児

文学部 史学科
辻 浩和



日本中世の女性労働について考える機会が増えた。最近では特に巫女に関心を持って、春日若宮（奈良市）の巫女たちのことを調べている。彼女たちは春日若宮の「拝殿（はいでん）」という場所に勤務し、遊女や神楽男などとともに、参拝客の依頼を受けて神楽を奉納する仕事をしていた。自宅は新薬師寺郷（高畑町）のあたりに集住していたと考えられるから、通勤時間は歩いて10分ほどであろうか。

春日若宮の史料には、巫女たちの労働環境を示す記事が

色々あって面白い。例えば巫女になるにはおおよそ1貫文（約10万円）の任命料が必要だったが、14世紀、南北朝内乱によって参拝客が減少すると、巫女たちは「収入が減少したのだから、任命料を半額にしろ」と集団で上役に訴えている。また、「職場の近くにトイレを作してほしい」と訴えたこともある。労働環境をよくすることに積極的な人々だったようだ。

気になっているのは、巫女たちがどうやって子育てをしていたのかということである。巫女に子どもがいたという不思議に思われるかもしれない。現在は、巫女イコール未婚の女性というイメージが定着しているが、そうしたイメージは近世中期以降、特に近代になって一般化するもので、中世の巫女は結婚し子どもを持つ者が少なくない。春日社の巫女たちも神社の関係者と職場結婚するケースが多く、生まれた子どもが女の子の場合、母と同じく巫女になる例が散見される。巫女は女系で代々相伝（世襲）される

職業だったのである。

さて、巫女は近くの家から神社に通ってくるのだが、神社で子育てをしていた形跡は見られない。春日若宮では境内で子どもがおしっこをしたり鼻血を出したりすると、その場所を祓い清めなければならず、その費用として罰金を徴収される。先ほど述べたようにある時期まで巫女たちの職場の近くにはトイレがなかったらしいのだが、それにもかかわらず、子どものおしっこで罰金を徴収されている例は見当たらない。どうも職場に子どもを連れてきてはいないようだ。

そもそもこの時代、働く女性たちはどうやって子どもを育てていたのだろう。これまで研究してきた遊女の場合には自宅が職場を兼ねており、基本的には自分で子育てをしていた。遊女が仕事に出ているときには、同僚や下女、祖母（遊女の母）などが面倒を見ていたようである。中世の子どもに関する先行研究を見ても、老人（祖父母）や乳母・下女が子守りをしていたと書いてある（男性が幼児を抱いている例はあるものの、かなり少ない）。16世紀くらいに

なると年長の子どもの子守りをしたり、母親が乳児をイヅメというわら籠にに入れて職場に連れて行ったりするようになるが、それまでは周囲の者が子守りをするのが一般的だったとみられる。とするならば、春日若宮の巫女たちの場合も、自宅で祖父母や下女が見ていた可能性が高いのだろう。

「それなら巫女たちの家族構成をきちんと復元しないといけないな…巫女の娘は何歳ぐらいになったら巫女の修業を始めるのだろう…息子の場合はどうなるのか…」。尽きない疑問を胸に、史料の山と格闘する日々が続いている。



春日若宮拝殿巫女（『春日権現験記絵』
国会図書館デジタルコレクションによる）

研究と劇作の狭間で

文学部 日本文学学科
千野 裕子



「お仕事は何をされているんですか？」——ちょっとした雑談のついでに、そう聞かれることがたびたびある。とりあえず「教員です」とか「大学で働いていて……」などと濁すのだが、これが美容院や整体での話となると、ややこしくなってしまう。向こうはおそらく施術の参考にするために聞いているのだろう。だから私は仕方なしに白状する。「いや、実は近々舞台の本番がありまして……」

私は平安時代を中心とした物語文学を研究しているのだが、その成果を論文などで発表する傍ら、舞台化するという活動も行ってきた。これは大学時代に仲間たちと「日本文学を舞台化するサークル」を立ち上げたことに始まる。当初は近代文学を扱っていたものの、4年目、大学生活最後の公演に『源氏物語』を選んだ。4年目ということは学生の本分として卒業論文があったわけだが、その現実から逃避して台本の執筆にとりかかった。台本を書くときにわりと重要になるのは、「登場人物をしぼる」ことだ。役者の人数にも上演時間にも限りがある。ではどのキャラクターを出すのか。原作をにらみながら考えているうちに、小さな問題に突き当たった。物語上は脇役、いやほんの端役なのに、ストーリーの進行上どうしても削れない人物がいる。この端役は、なぜここにいないといけないのだ……？ 現実逃避のために始めた台本執筆だったはずなのに、結局これが卒業論文のテーマになってしまった（ついでに演劇もやめられず「日本古典文学を舞台化する劇団」となって今に至る）。

以来、私の主な研究テーマは「王朝物語文学における脇役の機能」となっている。恋する貴族の男女を中心に展開

する王朝物語文学においては、主要人物の手足となって動く脇役が不可欠だ。それぞれの物語が脇役たちをどのように配置し、動かしているか……それを読み解こうとしているときの私の視点は、劇作家あるいは演出家としてのものなのかもしれない。

さて、昨年（2019年）のこと。所属している物語研究会の年間テーマが〈翻案（アダプテーション）〉ということで、古典文学を演劇に〈翻案〉することに関して発表をする機会に恵まれた。とある文学作品を舞台化した場合、観客の前に現れるのは、元テキストがパフォーマンスの形態に〈翻案〉されたものだ。しかしその過程では、元テキストを上演台本にする劇作家や、その上演台本を身体表現に落とし込む役者だけでなく、多くの専門家が〈翻案〉を行っている。作品のイメージを宣伝ポスターにする制作スタッフ、元テキストや上演台本にも書かれていない光を想像（創造）する照明家、上演とともに消えてなくなるはずの表現をプロマイドに収める写真家……。リンダ＝ハッチオンの理論でいうところの、「プロダクトとしての翻案」だけでなく「プロセスとしての翻案」を、実践者の立場から解きほぐしてみようと試みたのだった。発表の成果はさておき、継続して考えたいテーマが新たに見つかった。

そういうわけで、劇作をしては研究のヒントを得て、研究をしては劇作のネタを見つけて、をずっと繰り返している。たぶんどちらかを失ったら、もうひとつもできなくなるだろう。さすがに役者として自ら舞台に立つのはそろそろやめた方がいいような気もするが、体力と気力の続く限り、研究者と演劇人の狭間を行ったり来たりしたいと思う。



文学部
史学科
原田 晶子
教授



教育学部
幼児教育学科
野尻 美枝
准教授



生活創造学部
観光文化学科
柳川 悦子
教授



今年度史学科に着任いたしました原田晶子と申します。専門はドイツ中世史で、特に中世後期（14-15世紀）の南ドイツにあるニュルンベルクという都市における市民と教会の共生的関係をテーマにしています。「人はなぜ教会を建てたのか？」生まれて初めての海外旅行先であったドイツで感じた素朴な疑問が、現在の研究の始まりでした。元々中世史に興味があったわけではありませんでしたが、中世後期の都市では、普段は利害関係が異なる市民たちが協力し、ゴシック様式の壮麗な教会を建てていたことを知って、ドイツ中世史の研究を始めました。「出会い」というものは不思議なものです。ご縁のあった川村学園女子大学での皆さんとの「出会い」を大切にしていきたいです。皆さんもぜひ、大学生活におけるそれぞれの「出会い」を見つけてください！

幼児教育学科に着任いたしました野尻美枝と申します。専門分野は、保育実践史研究を軸とした保育学・幼児教育学です。20世紀前後のアメリカの幼児教育とその影響をうけて発展を遂げた近代日本の幼稚園の実践について研究しています。本学では、国内外での保育者経験後を生かし、教育実習演習、保育実習演習、保育内容総論等を担当させていただいております。子どもたちの主体性、最善の利益を守る保育者の資質、専門性について、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。一年間ですがどうぞよろしくお願い申し上げます。

今年度、観光文化学科に着任いたしました柳川悦子と申します。「観光の情報デザイン」、国家資格取得のための「旅行業務取扱管理者講座」など担当しています。私は大学卒業後、米国系航空会社で、広報・宣伝の仕事を十数年勤めたのち、MBA取得のために大学院で学び、ふたたび、仏系航空会社に戻り、日本・アジア地区の広報・マーケティング統括として、航空業界を中心とした観光関連産業に長年携わってまいりました。大学教員としてのキャリアは10年程ですが、実務家教員として、いま、世の中の観光の現場で実際に起こっている事象について、学生の皆さんと共に考察してまいりたいと思います。

新任教員紹介



退職教員 ~2020年度~

【退職】 本学を退職する教員をご紹介します。皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

中園 有希	文学部史学科 准教授
橋本 磨美	文学部史学科 講師
北原 靖子	文学部心理学科 教授
松原 由枝	文学部心理学科 教授
尾見 敦子	文学部日本文化学科 教授
野尻 美枝	教育学部幼児教育学科 准教授
寺岡 聡志	教育学部児童教育学科 准教授
矢田 訓子	教育学部児童教育学科 准教授
今井 久美子	生活創造学部生活文化学科 教授
大坂 佳保里	生活創造学部生活文化学科 教授
渡邊 昭彦	生活創造学部生活文化学科 教授
種村 聡子	生活創造学部観光文化学科 講師

Pick UP!

新刊のお知らせ



日本中世の政治と制度

史学科 准教授
辻 浩和 共著

出版社：吉川弘文館
発行年：2020年11月



増補改訂新版 日本中世史入門

史学科 准教授
辻 浩和 共著

出版社：勉誠出版
発行年：2021年2月



鑑真と唐招提寺の研究

日本文化学科 教授
眞田 尊光 著

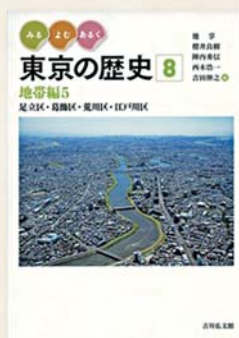
出版社：吉川弘文館
発行年：2021年2月



正倉院宝物の輝き

日本文化学科 教授
眞田 尊光 共著

出版社：里文出版
発行年：2020年10月



みる・よむ・あるく 東京の歴史 8 地帯編 5 (足立区・葛飾区・荒川区・江戸川区)

日本文化学科 教授
眞田 尊光 共著

出版社：吉川弘文館
発行年：2020年2月



第二版 知る！わかる！身につく!! 公衆栄養学

生活文化学科 教授
今井 久美子 共著

出版社：同文書院
発行年：2020年3月

心理相談センターの活動

春から感染拡大予防のために閉室していましたが、感染対策を講じた上で8月から相談業務を再開しました。相談を希望される声をいただく一方、来談への感染不安を感じられる方も多くいらっしゃいました。そうした方々にも支援を提供できるようにと、従来の対面式だけでなく、ビデオ通話のような形でオンラインカウンセリングを導入致しました。初の試みでしたが、試行錯誤の末に環境を整えることができました。対面とは異なる環境に最初は戸惑いを感じられる方もいらっしゃるかもしれま

せんが、相談を必要とされている方の心の負担を軽くできるよう、相手に寄り添った対応を心掛けております。今後も地域に開かれた「こころの相談室」として尽力していきたいと思っております。



花時計 vol.42 2021年3月1日 発行日

【発行】川村学園女子大学 【編集】広報委員会

■我孫子キャンパス

〒270-1138 千葉県我孫子市下ヶ戸1133番地

TEL 04-7183-0111 (代表)

ホームページ <https://www.kgwu.ac.jp/>

■目白キャンパス

〒171-0031 東京都豊島区目白3丁目1番19号

TEL 03-3951-0111 (代表)

大学ホームページ



大学ブログ



facebook



twitter



LINE



Instagram

